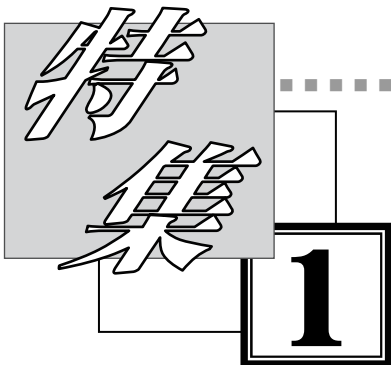




J A 共済総研セミナー

『地域社会の再生に向けて』（2012年3月9日開催）報告①

住民を主体にした地域づくり ～復興・再生への道～

民俗研究家 結城 登美雄

講演要旨

東日本大震災は、人間が生きていく上で最も大切な食料とエネルギーが、脆く危ういことを突きつけた。私たちはその前提に立ち、今後の日本を考えていかなければならない。

戦後、経済のモノサシでのみ社会を築いてきた私たちにとって、住民主体の地域づくりを進めてきた沖縄・東北のお年寄りたちの生き方は、地域社会の再生を考える上で一助となる。そこからわかることは、「よい地域を生み出すのは、そこに暮らす人々の心と行動にほかならない」ということだ。東北のお年寄りたちの声から考察した「よい地域の7つの条件」も、再生のヒントとなるだろう。

最近では、CSA (Community Supported Agriculture : 地域支援型農業) という生産者のリスクの一部を消費者が負担するシステムの動きもある。こうした仕組みをベースに、農家と消費者をつなぐ役割というものが、今後の農協に問われているのではないだろうか。

1. 戦後社会の姿

戦後、私たちは地域社会に対応して、もう1つの企業社会というものを構築してきました。人はそれぞれの地域に生まれて子ども時代を過ごし、やがて企業社会にどう帰属するかをめざしてきた。そうすることが豊かになれる、幸せになれることだと考えていたからです。しかし、本当にそうなのでしょうか。

私たちは企業社会から取り残されている地域を、過疎地、限界集落などと呼んでいます。しかし、そこにはまだ地域的な社会を大切に思う人々が暮らしています。地域社会の再生を考える際には、そのあたりを改めて振り返る必要があると思います。

2. 東日本大震災

(1) 被災地を訪れて

東日本大震災発生当時、私は被災地にいる



たくさんの友人・知人からの「彼が死んだ、彼女も死んだ」「ここが壊れた」「ダメだ」という悲鳴のような声を電話で聞き、仙台にいらながらも1カ月ほどは現場に近づけませんでした。行かなければと思いつつも、どんな顔をして行けばいいのかわからず、おろおろするばかり。我ながら情けなく思いました。

それでも1カ月後、思い切って陸前高田や

気仙沼に行ってみました。漁協の建物をはじめ、入り江にある建物の9割はだめになっていました。5万トンほどの冷凍庫の中にあった魚は腐り出し、それを廃棄する虚しい作業が続いていました。

また、2万haあった水田も被害を受けました。お米に換算すると、170万人のお米がつかれなくなったとも言えます。

(2) 大震災が私たちに突きつけたもの

今回の大震災が私たちに突きつけたテーマはたくさんあるかと思えます。しかし私は、人間が生きていく上で最も大切な食料とエネルギーという社会の土台がかくも脆く危うい、ということを突きつけられたと感じています。「おまえたちはこのままでいいのか?」「何を食べてこれから生きていくのか?」と問われているように感じました。

3. 食料とエネルギーの自給率

我が国の自給率は、カロリーベースで4割を切ろうとしています。エネルギーの自給率は原子力を入れれば17.9%ですが、それを外せばわずか4%にすぎません。食料とエネルギーの自給率がそんなに脆く、危ういところにあるこの国、社会は大丈夫なのでしょう。

都道府県別の食料自給率は、東京1%、大阪2%、神奈川3%です。戦後社会は「食料は金で買えばいいよ」とうそぶいて、ここまで来しました。その脆さ、危うさを、今、私たちは引き受けさせられているのです。

一方で、東北の人は土の上に種をまき、苗を植え、懸命に働き、自給率は107~108%です。でも労働条件は過酷で、米づくりなら時給179円くらいにしかありません。しかも、農業者260万人の半分は70歳以上の高齢者です。その人たちが年金をつぎ込みながら食料をつ

くってくれています。つまり、私たちの食料は国の施策によって保たれているのではなく、そうした人たちの労働の上に辛うじて保たれているのです。

4. 食料は最大の社会資本

『国家』という本に、ソクラテスが弟子のプラトンたちと議論をした時の記録が載っています。プラトンたちが「国家にとって一番大事なものは何でしょうか」と問うたら、ソクラテスは「あらゆる必要の中で、最初にして、最大のものは、生命と生存のための食料の供給である」と言ったそうです。

「食料の安定供給こそ国家第一の課題である。食べなければ何ごとにも始まらないではないか。働けない、道路も造れない、病院もできない、学校にも行けない。食べてのち、人の暮らしはあるぞ」。

この当たり前のことをソクラテスは何度も繰り返しています。あえて今日の言葉で言うならば、彼は「食料は最大の社会資本である」と言っているのです。

しかし日本は戦後、「そんなものは安く外国から買えばいい」という考えで突っ走ってきました。政治家の皆さんにもう一度かみしめてもらいたいのは、「人は食べなければ生きていけない」ということです。

5. 食は自然に働きかけて生まれる

(1) 日本の食はこれからもあるか

正直なところ、私は7~8年前までは食べ物がないことを疑ったことはありませんでした。しかし、20年以上にわたって約800カ所の東北の村々を歩き、たくさんの耕地が荒れて原野に化していく姿を見せつけられることで、「この国は食べ物に苦しむ国になる

のではないかと気づかされました。

皆さんは日本の食はこれからもあると考えますか？ なくなると考えますか？ どちらの前提に立つかによって、日本の一次産業や食料、TPPなどの考え方は大きく変わります。私は少数派かもしれませんが、日本の食料はこのままでは危うくなると確信しています。

(2) 現在の政策の問題点

現在の日本の政策は、「面積が大きい農地は保護するが、4ha以下の農地はいらない」という、訳のわからないモノサシを用いています。それを政策と呼ぶアナクロニズムに対し、私は大きな腹立たしさを覚えています。どんなに小さな農地であっても、人にとって大切な食料をつくっているのであれば、それをしっかりと感謝し、評価することが必要ではないでしょうか。

農業、漁業は常に自然を相手にしている生産活動です。食は自然に働きかけてしか生まれません。自然相手では計算できないことがたくさんあり、人間が調整をしながら、辛うじて食料は私たちの食卓に届きます。そのことをしっかりと受け止めるべきだと思います。

(3) どのモノサシで見るか

東日本大震災では、その自然が牙をむきました。しかし、私の知る漁師たちは海を恨んではいません。「もう二度と海を見るのは嫌だ」と言っていた人たちも、半年を過ぎたあたりから船を直し始め、漁具・漁網を繕い始め、春の漁に備える姿が出てきています。彼らは、「海は厳しいけれども、豊かな恵みももたらしてくれるものだ」と言うのです。

一方で、漁業や農業を経済と産業のモノサシでしか見られない人たちも多く存在しま

す。経済のモノサシで採算が悪かろうと、海や農地は人生を生きる大切なバックグラウンドであり、そこで生きていくことを幸せだと感じる漁師や農家の人たちが東北にはたくさん住んでいることを忘れてはいけません。

6. 沖縄の大切なもの

この十数年は沖縄に毎年通い続けています。大震災でもたくさんの沖縄の方に来ていただきましたが、現場を見た何人かの人たちが、「この風景は、焦土と化した戦争直後の沖縄の姿とダブります」とおっしゃっていました。そして何人もの方から、「沖縄は、近代以前は琉球や薩摩に支配され、戦後は米軍に占領され、それでもここまで復興・復旧できました。その力はお金の力だけではありません。人の力で復興・復旧してきました。あえて言うならば“ゆいまーるの力”が大事だと思います」という励ましをいただきました。

それで思い出すことがあります。90歳以上のお年寄り50人から「大切だと思うもの」の聞き取りをした経験です。その調査で出てきた言葉が、「あたい」「ゆんたく」「ゆいまーる」「てーげー」という言葉でした。

(1) あたい＝自給菜園

「あたい」とは、家の辺りという意味です。家族が食べる食料は家の近くで育てる。つまり、「食べ物自給が基本」ということであり、沖縄ではどこへ行っても、おじい・おばあが家の周りで農作業をしています。

東日本大震災では食べ物がなく、震災3日目におむすびを1個食べて涙が出たという話を聞きました。食料危機を生き延びたような体験をしたことで、身近に食べ物をつくってくれる人がいることを本当にありがたく感じたそうです。そういう意味でも、沖縄の「あ

たい」は大切なヒントを与えてくれています。

“自給＝貧しい”は、戦後の豊かさを追いかける私たちの曇った目です。“我が国民の食料は我が国民の手で”ということを基本にすべきです。ちなみに、「あたい」のお裾分けが、今では全国に13,000カ所あるとも言われている直売所の原型のようなものです。

(2) ゆんたく＝地域ミーティング

「ゆんたく」とは、おしゃべりとお茶飲みのことです。戦後、私たちが「そんな暇なことをしてられるか」と言って無視してきたものです。でも「ゆんたく」は、心を通じ合わせることができるのです。

ある104歳のおばあの家には、毎朝6時に近所の26軒の人たちが集まってきます。76歳のお嫁さんは毎日、縁側に沖縄茶が入ったポット4つとお茶菓子の黒糖を用意し、そこでおしゃべりが始まります。

あるおばあが壊れた鎌を持ってくれば、おじいさんが「お昼までに直してやるよ」と言う。また別のおじいさんが「キャベツの苗が余ってないかな？」と言えば、おばあさんが「うちにあるよ」と言う。「あのおばあはこの頃来ないね。どうしたんだろう」と誰かが言えば、別の人が「ひ孫の顔を見に行っていて、明後日帰ると言っていたよ」と言う。つまり、毎朝30分の地域ミーティングが、身近な悩みをすべて解決する場になっているのです。

(3) ゆいまー＝結回し

「ゆいまー」は結回しという意味で、お互いさまで共同労働するということです。たとえば、あるおばあさんが入院したら周囲の人が菜園の草取りをし、お礼にと勝手にキャベツを持っていきます。みんながお互いにそうします。ですから自分の畑に他人が入ってきても、誰も不思議がりません。

また、沖縄の人たちはいたずらに蔵書を増やさず、読み終わった本は、ほかの人のために持ってきます。それが集まって、ある地域で「ゆいまー文庫」という図書館ができました。

さらに、沖縄には共同売店というものがあります。集落全戸が出資している、よろず屋のような店です。ツケで買いものができる共同店もあり、支払いは半年後まで延ばすことができます。ただ、ディスカウントの値段に慣れた私たちからすれば、商品の値段は高く感じます。

ある時、おばあに「ビールを飲もう」と誘われ、お嫁さんが共同店に220円のオリオンビールを買いに行ってくれました。そのビールを全部を空けたあと、私は悪いと思い、おばあに「あっちのスーパーなら148円で飲めるね」と言ったところ、「あんちゃん、高いビールはうんまいじゃ」とすごまれました。

なぜ高いビールがうまいのか。それは、最後にみんなに返ってくるものがあるからです。その村では、共同店の1年分の利益を使い、大正の初めからさまざまなものをつくってきました。最初は今も続く奨学金制度を設け、次に医療費無利子融資制度を設けました。精米所も、村の船もバスも、泡盛工場も造りました。金融業もやりました。発電所も建設しました。つまり、高いビールは村のみんなに利益をもたらすのです。

「ただ出資するんじゃないぞ。みんなで出し合い、育てる。その育てることが、高いビールがうんまいにつながるんだ」とおばあに言われました。目先の利益で「10円安い」と走り回る私たちの消費とは違うのです。

7. 岩手県山形村の地域づくり

東北にも住民が主体になる、あるいは主体にならざるを得ない集落があります。現在の岩手県久慈市、かつての山形村の山奥にある、荷軽部字木藤古バッテリー村という5戸18人の村です。私はこの村に20年以上前から毎年通い続けていますが、この7～8年は約3,000人の若者が通ってくるようになりました。なぜ、人も来ないような村に多くの若者がやってくるのでしょうか。

実はかつて、効率化という名の下に役人が住民たちを山から下ろそうとしました。しかし、住民たちは400年続くその村に残るという選択をし、みんなで話し合っ「村の目標」を決めたのです。この目標に、住民主体の地域づくりの原点が書かれています。

この村は与えられた自然立地を生かし
この地に住むことに誇りを持ち
一人一芸 何かをつくり
都会の後を追いか求めず
独自の生活文化を伝統の中から想像し
集落の共同と和の精神で
生活を高めようとする村である

東北を歩いていると、「もう少し雪が降らなかったら」など、立地に対する愚痴がいつい出てしまいます。でも、不満を言っても立地は変わりません。それならば、立地条件を生かすことを心得ようということです。

誇りをどのようにして持つのかは私にもわかりません。ただ、炭を焼く窯に「研究所第1黒炭釜」と名づけるあたりに、誇りへの第一歩があるような気がします。

また、この村では木の皮を利用してモノをつくっています。買うだけを価値とせず、つ

くれるものはつくる。「買う力は弱くてもつくることはできる」という自負があります。

「都会の後を追いか求めず」は、都会に追従しないという意味だけではありません。この意味をお年寄りに聞くと、「都会には都会の大変さがある。山村には山村の大変さがある。同じように都会には都会のよさがあり、山村には山村のよさがある。どちらがよいか、それをどう選ぶかは、おまえさんたちの問題だ。我々は山村で生きることを選ぶ」と言っていました。これが本来の意味です。

この精神で5戸18人が力を合わせて努力し、藪だらけだった地域が、私が訪ねるたびに美しく生まれ変わっていきました。その噂を聞いて、若者たちがたくさん集まる場所になったのです。就職氷河期を生きなければならぬ若者たちが、この村でさまざまな生きるヒントを得て、「私の新しい大切な故郷です」と言ってくれるまでになりました。

8. そこに暮らす人がよい地域を生み出す

柳田國男さんという民俗学者が、昭和4年に書いた論文があります。その言葉を私なりに整理してみました。

美しい村など、はじめからあったわけではない。美しく暮らそうという村人がいて、美しい村になるのである

地域づくりは学者の実験所ではありません。地域は人間が人生を生きる場です。そこにいる人たちの思う心と行動が、よい地域を生み出していくと私は思いたい。そして、それを応援していくことが、私にもできることだと思っています。

東日本大震災の復興も同じで、もっと現場の声に耳を傾け、立ち上がろうとする人々を応援することが大切です。しかし今、復興会議で勝手に決めた絵を現地の人に押しつけてしまっていないかと危惧しています。

9. 鳴子の米プロジェクト

私が少し関わった「鳴子の米プロジェクト」というものがあります。きっかけは、2006年4月に国が導入した品目横断的経営安定対策という施策です。その施策によって鳴子は620戸中5戸しか支援されない町となりました。みんなはもうダメだと落ち込んでいましたが、「それを地域みんなで支えることはできないか」「つくる人と食べる人が向き合うことでこの状況を超えられないか」ということで始まった動きです。

(1) 鳴子の米を支える仕組み

生産者と何度も話し合い、当時1俵13,000円だった生産者価格を18,000円にしました。この金額なら農業を続けられるということです。そして、消費者には1俵24,000円で買ってもらいます。市場原理やブランドではなく、「大切な食べ物を身近にいる人たちがつくってくれるから、私たちの暮らしがある」と理解してくれた人々が参加してくれました。差額の6,000円から保管料や事務経費を除き、残りは若者の農業支援に使われています。

(2) 地域に合った品種でよい米をつくる

雪解け水が冷たく、最初は反6俵しか穫れませんでした。その地域に合う品種「東北181号」に変えました。30aから始まり、今では約20haの山間地で、38の農家が米をつくっています。

つくり手は、40～50年もの間、米づくりをしてきた人たちです。「よい米をつくってく

ださい。そうすれば1俵18,000円で5年間保証します」とだけ言いました。

(3) 働く姿を見せる

ただ、自然乾燥だけはお願いしました。なぜなら、大変な杭掛けの作業を多くの人たちに見てほしかったからです。

今は、誰が、どこで、どんな思いで、どんな労働の上に食べ物をつくっているかが見えない時代です。でも、田んぼの前には小・中学生も観光客も通ります。働く姿から、食べ物は人間の労働から生まれるということを受け止めてもらいたいと思ったのです。

(4) 米のスイートスポットを見つける

米粒に等級ばかり付けますが、食べるのはご飯です。そこで、お母さんたちに15ccずつ40回の炊飯テストを行ってもらいました。

その結果、「東北181号」という米は、「ひとめぼれ」より水分を15%少なくして炊くと香り立ち、光り輝くことがわかりました。どんな米にもスイートスポットがあるのです。それが見つかった時の農家のお母さんたちのうれしそうな顔は忘れられません。みんなが自分たちの米に自信を持ったのです。

(5) 地域の人々で応援する

その後、多くの人に集ってもらい、おむすびの試食会をすることになりました。

みんながいろいろ考えて、100種類ものおむすびが集まりました。鳴子に住む漆職人は漆の器を寄付してくれました。また、クズ米を米粉にしてお菓子屋4軒に持っていったところ、1軒10種類ずつ、合計40種類の米粉のお菓子をつくってくれました。地域の人たちが「俺も一肌脱ぐよ」と関わってくれて、試食食品がどんどん増えたのです。

私は勝手に「豊」という字のマークをつきました。白川静さんに教えていただいた字

で、下の豆の字は神様にお供えをするときの
高坏という器を表し、その上に乗っているの
が穀物の穂だと言われています。「神様、たく
さんの作物がとれました。ありがとうございます
です。これで安心して暮らしていけます」と
いう思いが込められています。

(6) 鳴子の米のプライド

ただ、中には「もう少し安くならないか」
と言う人もいます。そこで、試食会の展示場
に「ごはん一杯いくら？」というブースを設
けました。

60kgの米はご飯1,000杯分ですから、1杯24
円になります。これはイチゴ1個分、笹かま
ぼこ7分の1切れ分、ポッキー4本分です。
この「1杯24円」という値段を表示すること
で、「これが高いと思う人は買わなくて結構
である。それが鳴子のお米です」というプラ
イドを持ちたかったのです。

(7) 広がる交流

その後もいろいろな人が手伝いに来てく
れ、農家の人たちとの交流が生まれていきま
した。子どもたちが稲刈りを手伝いに来たり、
田んぼが宴会の場になったりしています。

私は鳴子唯一の中学校で、生徒220人を講堂
に集めて授業を行いました。そしたら子ども
たちから、「こんな安い値段だと知らなかつ
た。私を育てるために父母は、祖父母は農業
を捨てたのでしょうか…」という言葉が面々
と綴られた感想文が、段ボール1つ寄せられ
ました。そして、「もうそんなふうにはならな
いでほしい。私たちができることをしたい」
と言って、80人の中学生が稲刈りの手伝いに
来てくれました。

その時、お礼に授業をしました。新聞紙を
開いて置いた分だけ刈り残し、「その新聞紙
分で稲がだいたい12株。これは、日本人が1

日に食べるご飯3膳分の量にあたる」という
授業をしたのです。

すると、中学3年の男子が稲に向かって手
を合わせ、「ありがとうございました」とお祈
りをしたのです。続くように、ほかの子ども
たちも稲に頭を下げ始めました。農業をした
こともない中学生たちが、食べ物大切さと
その労働に対して頭を下げたのです。その姿
を見て、「この国はまだ心のある子どもたち
を失ってはいない」と感じました。

10. 地産地消からCSAへ

(1) CSAの仕組み

最近、アメリカではCSA（Community
Supported Agriculture：地域支援型農業）
が増えていて、約12,500のCSA農場があるそ
うです。

前金を払うと、たとえば大人2人・子ども
2人分の野菜が会員に届きます。金額は週30
ドル、年間600ドル。日本円にすると年間約6
万円です。100軒集まれば600万円になります。
2～3月頃に話し合っ種をまき、できたら
届けてもらうという仕組みです。不作でも返
金なしというルールです。

なぜ前金で、不作でも返金しなくてよいの
か。それは、農業は自然相手の仕事であり、
どんなリスクが起きるかわからないからで
す。今まではそのリスクを全部生産者に押し
つけてきましたが、消費者もその一部を負担
すべきではないかという意識の変化がありま
す。生産者と食べ手の距離が少しずつ縮まっ
ているように感じます。

(2) 日本のCSA

このCSAを日本で実践しているのが、北海
道のメノビレッジ長沼です。年会費は39,600
円。労働費、種子代などの運営費がすべてオ

オープンにされていて、それを80軒で割って1軒35,400円、配達経費が4,200円となります。

経費をすべてオープンにしているのは、「私に代わって大事な食べ物をつくってくれる人によろしくをお願いしたい」という食べ手の気持ちと、「日本の農業のためではなく、私を頼りにしてくれる80軒の人々の食卓のために私の農業はある」という生産者の気持ちの表れではないと思います。

(3) これからの農協の役割

もちろん、CSAがすべてではありません。ただ、これからの日本の農業には、CSAをベースにした動きも大切だと思います。そして、それをつなぐ役割が農協にないだろうかと思っています。生産者の代表として取りまとめるだけではなく、消費者が参加できるような仕組みをつくっていく役割が、農協には問われているのではないのでしょうか。

日本の消費者が、「私に代わってつくってくれる人によろしくと言ってほしい」という気持ちを理解する日も近いと思っています。その気持ちをうまくつないでいく役割を、農協にはお願いしたいと思っています。

11. よい地域の7つの条件

20年以上にわたり、東北の約3,000人のお年寄りに「いい村であるにはどんなことが大事なのか」を聞いてきました。その中から、私が間違いなく大事なことだと思った「よい地域の7つの条件」をお伝えします。

(1) よい自然風土があること

よい自然風土とは、よい水とよい光とよい風とよい土だそうです。これらは人間がつくれないものですから、大切にしなければいけないということです。

ただ、土だけはよくすることができる。だ

から、「土をよくする仕事が農業の半分の仕事だよ」と教えてくれる人もいました。

(2) よい仕事の間があること

よい仕事とは、金額が高い仕事ではありません。おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、そして次を生きる子どもたち。そのみんなの仕事の間が準備できている、ということです。

(3) よい居住環境があること

震災に遭った人たちは、失って初めて当たり前にあった居住環境のありがたさを話しています。

(4) よい文化があること

文化とは何か。その定義を私よりうまく説明してくれるのは、山のお年寄りです。「文化とは、みんなで一緒に楽しむこと」と言っていました。働くだけが人生ではない。みんなと一緒に音楽、絵、祭り、食事を楽しむ。そういう心がもたらすものが、よい文化です。

(5) よい仲間がいること

人口の数で優劣をつけてはいけません。身近によい仲間がいること。これが最も大事だと言います。

(6) よい学びの間があること

「知識をいくら持っているか」ではありません。活かす力、役立つ力、支える力といったものが学べる間があるかどうかです。

(7) よい行政があること

これは私が偉そうに言うことはできません。ただ、よい行政があれば村がよくなるということではなく、地域の人たちを受け止めて支援していく役割を持つ行政がよい行政なのではないかと思ったりします。

(文責：調査研究部)